

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部
 ■発行日 2004年5月15日(土)
 ■連絡先 藤川博樹
 〒115-0045
 北区赤羽 1-48-3-203
 TEL 03(5249)5797
 E-mail:microd@mdn.ne.jp
 http://www.mdn.ne.jp
 ■編集 塚原、佐藤、蒲原(雅)
 蒲原(直)、藤川

NO.272

6月行事日程

■ニュース編集

*原稿はテキスト形式にしてメールで以下へお送りください。

E-mail monten@pop06.odn.ne.jp

編集日の前日までにお願いします。

◆6月19日(土) 16:30～

※四谷地域センター 11階

※地下鉄丸ノ内線「新宿御苑」下車、大木戸
門口方面、徒歩5分

◆振込用紙を同封しましたので、2004年度
会費1200円の振込みをお願いします。



合同出版、1365円

■白六郎氏(蒲原直樹)の「マンガ版劣化ウラン弾」が合同出版から発売された。折しも、イラクで拘束された日本人の一人、今井さんが高校卒業したばかりで、劣化ウラン弾の調査のために現地入りしていたことが注目されたりして、時宜にかなった本と言える。■この本を読むと、劣化ウラン弾というとてもない兵器がなぜ悪魔の兵器なのかがよくわかる。使う側にとつては原子力発電所の廃棄物の便利な「有効」利用であり、捨てる先にも困る迷惑物が、安上がりな兵器として使えるという都合のよさ。しかも戦車も地下基地も豆腐のように貫いて破壊できるという「優秀な」兵器である。この兵器は湾岸戦争にも使われ、イランの兵士、市民に放射能による甚大な被害を与えただけでなく、使った側のアメリカの兵隊も放射能の後遺症で今も苦しんでいることなど。■力が入った、よい本である。「去年の勉強が無駄にならなくてよかった」と本人もいうように、昨年からコツコツと資料を集め、図書館に通って勉強したかいがあったということだ。内容も正確で、主張もはっきりしている。■そして何よりも前書きの文章がいい。迫力がこもって感動的。ここだけでも読んでほしい。個人的な感慨を述べれば、26年間にわたって、ふみの会でたかだか読者数十人を相手に、一円にもならない文章を書き続けた成果が現れていると思う。これは売れてほしい本、売れるべき本である。(F)

ジャンクタウン戦記

20

蒲原直樹

「これはお詫びの電話です。反町さんを戦闘に巻き込んでしまつて……申し訳ないことをしました」

ラファエルは沈んだ声で言った。

「メンバーにはくれぐれも気をつけるように言つておいたのですが、血の気の多い男たちですので、歯止めが利かなかったようです。彼らにはあなたの存在の特別さがわかつていないのです」

「特別だなんてそんな……」

反町は、なぜか自分を過大に評価してくれるこの女王様に恐縮する。

「それより、ダルマーさんたちを逮捕させてしまつて、こちらこそ悪いことをしたと思つてる。自警団のてまえ、逃がしてやれなかつたんだ」

『「神の剣」部隊6号・7号ですね。……彼らの戦線離脱は痛いですが、私の命令をきかない越権行為をしたのですから仕方ありません。魔穢同の戦力はまだまだ強大ですから、大局的にはそれほど影響はないと申し上げてお

きます」

「その大局のことだけ……」

反町はいいチャンスだと思つて、女王様から情報を聞き出そうとした。

「魔穢同の総攻撃はいつ行われるんですか？ 場合によっては従軍したいのですが」

「それは……最高機密なので、残念ですがあなたにも教えられません」

ラファエルは悲しげながらも決然とした口調でそう応えた。反町はため息をついた。

「しかし、それを含めてあなたと話し合うことは出来ません。どうでしょう、明日にもお迎えに行きますので、私の別荘へおいでくださいませんか？」

願つてもない申し出なので、反町はもちろん急いでOKした。誘つたラファエルの声は心なしか震えているようだった。自分の趣味ではないものの、

美少女の震える声は反町の胸を騒がせた。携帯を折りたたんだあとと彼の胸騒ぎはしばらくおさまらなかつた。

夕食の鮫鱈鍋は味噌の味がよくしみ

た白身と、コリコリ歯ざわりのよい軟骨の取り合わせがえもいわず美味で、しばし雑事を忘れた。しかし夕食後数本のメールを打ち、寢床についたあと反町は長く寝つけなかつた。

翌朝の目覚めは遅かつた。朝食の後、反町はモバイルギアで情報を再確認した。

梁承一（ヤン・スニール）に調査を依頼されてから、彼はインターネットで情報を探した。九八年八月の地方紙の記事を求めていくつかのサイトをさまよつたあと、彼は探していた記事を見つけた。それは「なんぶ日々新報」の過去記事の中にあつた。

『隕石か人工衛星か？ 葛山湾の落下物が盗難』

そんなタイトルがついた記事を、反町は全神経を集中して読んだ。そして謎は深まるばかりだと感じた。その記事はコンパクト・フラッシュ・カードに収めてここに持つてきている。

【葛山町中谷通信員発】二十日未明、

葛山町北東に赤く細い光の筋が目撃された。流星か隕石と思われる光は葛山湾の浅瀬に落下し、葛山町新田の農業・高田庄治さん（54）が役場に通報した。それを受けて葛山町観光課副課長吉田孝さん（46）と漁協理事長志村謙一さん（61）が職員数名を連れて現場を捜索した。そして直径約五〇センチの岩石とも鉱物ともつかない物体を発見、役場に持ち帰つた。

物体の外観は茶色に錆びた鉄の色で、複雑な模様があり、見方によっては人工の機械にも見えるため、人工衛星の一部ではないかという意見があつた。東北大学から専門家を招いて鑑定する予定でいたところ、昨二二日午後になつて職員が保管室を開けるとすでに何者かに持ち去られ、なくなつていた。

重さが約三〇〇キロもあつたため一人では運べず、ジャッキを使用したあともないので、警察では複数犯の犯行とみて調べている』

この記事の続報はいくら探しても出てこなかつた。ということは、公式には落下物は発見されていないことになる。現物があれば大きなメディアが取り上げて話題になつたかもしれないのに、肝心の物体がないためにこの大スクープはそのまま消えてしまった。

（観光課が観光の目玉になりそうなものを簡単に紛失してしまうところ

が腑に落ちない。そこに役場側の意図を見ることも出来る。しかし証拠はどこにもないのだ……)

反町は午前中を消えた物体の行方を考えることでつぶした。昼には赤潮荘の食堂でまたばあさんの作るうどんを食べた。

午後、黒いアウディが迎えに来た。運転席から挨拶する顔を見ると驚いたことに菊石農場の唐島だった。前に見た作業服ではなく、派手なアロハシャツに水色のスーツ、赤いレンズのサングラスという粋な格好をしていた。胸元の金鎖はこの時こそ輝いて見えた。

「やあやあ、トムさんでしたっけ？あなたはラファエルとも仲良しなんですか……ビックリですね。しかし、じきじきのお迎えとは恐れ入ります」

「いえいえ、私なんぞ使い走りですよ」唐島はこともなげに応えた。反町はアウディに乗りこむと、すぐにそれが普通の車ではないことに気づいた。

「完全武装ですね、板金の厚さが違う……ガラスもはめ殺しの防弾でしょう。タイヤもパンクレスだ。これで機関銃がついていれば装甲車ですね」

「ありますよ、機関銃……床下に二〇ミリガトリング砲が収納されています。手動ですが、一分で取り出してサン・ルーフの上から射撃できます」

唐島は反町の足元を指差しし、そこにある格納室とレバーを示した。

「やつぱりトムさん、カタギの人じゃなかったんですね。博徒系暴力団『暗門会』若頭の唐島勉は、やつぱり百姓のままじゃいられないんだ」

「その呼び方はやめてくださいよ反町さん、あなただつて韓国空挺師団ホワイ・タイガーのキャンプで訓練を受けた武闘派じゃないですか」

言い返されて反町は驚いた。どこから自分の個人情報が出たのか……しかし、カーリーが唐島に教えたという可能性も考えられたので、かろうじて動揺を押し隠した。

「お互い、脛に傷というわけだ。しかし、この町で最強の武装集団というやつぱり菊石会なんですね？魔羯同なんでお子様の集団だと思っているんですよ？」

「まあそういうことになりませんか」
「こんな車や機関砲がどのくらいあるんですか？」

「二個中隊くらいでしょうか……でも、ご存知のように軍事力を保持しようとする大金がかかります。わたくし、嫌いなんですよ、不経済で……この車だつて重さが倍だからリッター二キロしか走りません。でも、古い幹部たちにはなかなかそれを捨てられないんです」

「でも、これからはないと困ることになりそうですね」

「いやですねえ、戦争は……でも、やるからには負けられません。反町さんもクラウゼビッツや孫子は読んだでしょう？」

「『反デューリング論』も、いちおうね」
二個中隊という小隊八人が十数組に輪送トラック、迫撃砲、装甲車両が合計で百人くらいの兵隊になる。それに数台ずつという配分だ。『反デューリング論』は軍事力至上主義を唱えるデューリング博士に対し、エンゲルスが軍事力は経済力総体の上にはしか存在できない、と反論したものだ。

「最低、負ける戦争はやっちゃいけません。それもぎりぎりの接戦ではなく、余裕で勝つことです。最小の犠牲ですみますから……でも、それもコストを考えないと」

反町は基本的な質問をしてみた。
「トムさんはラファエルとカーリーを、天秤にかけているのですか？」

唐島はハンドルを操りながらしばらく無言だった。そしてゆっくり応えた。

「……知り合った最初の頃はとても仲のいい人たちだったんですよ。お互いにも補い合っていました。あの二人は分かれるべきではなかったんです。どちらが欠けても戦争には勝てません。どうしてこんなことになったの

か……わたくしも辛いんですよ」

そんなことを話している間に武装アウディは喪黒川を渡り、海岸に沿った白い道を通った。海岸沿いはゴミの量も少ない。しばらく走ると緑の芝生が映える別荘地のような地域に入った。ゴミの町にもこんな綺麗な地域があったのか、と驚くほどの美しい住宅街だった。

車はやがて一軒の屋敷に入った。高い塀に囲まれ、屋敷森に包まれた大邸宅だ。塀の上には鉄条網が張り巡らされ、監視カメラがこれ見よがしに並んでいる。ちよつとした要塞だ。アウディが塀の中に入り反町が車を降りると、ベランダからワンピース姿のラファエルが庭に降りてきた。アウディはユーターンして門を出て行き、鉄の門扉が音を立てて閉じた。

「よくいらっしやいました」
ラファエルが弾んだ声で言った。長い黒髪をざっくりと編み上げて巻いている。そこに一輪の椿をさしている。もともと美しい娘だが、シンプルな服装に薄化粧だと甘ったるさがなくなつて素材のよさが際立ち、逆らいがたい美しさだった。

コンピュータは必要か？

①

藤川博樹

■ パソコンはなぜ高度な処理ができるのか

現代社会が、すでにコンピュータなしでは機能しないことは誰でも知っている。そして、誰でもその恩恵を受けている。キャッシュカードで金を下ろし、切符を買って列車に乗り、指定席の予約をし、メールを送り、車を運転する。誰でも現代文明の恩恵を受け、その中心にコンピュータが働いていることは知っている。それから逃れることはできないし、逃れようとも思わない。むしろ無意識のうちにその恩恵を受けて、生活を楽しんでいる。

ただ、ふと疑問に思うことはないだろうか。いや、文明の根拠を問えと言っているのではない。近代を否定するのは簡単だが、高度情報処理社会の実現が人を幸せにするのかどうかを問う前に、現代人の生活はそこにどっぷり

と浸ってしまったている。いまはその話をしているのではない、現代人がそのうえに乗ってしまっているシステム

の根底にあるコンピュータ、その現実の姿とこのはいったい何なんだろうと問うているのである。IT（インフォメーションテクノロジー）を知らずして、ITを否定する事はできない。テクノロジーが人類を幸せにするのか、破壊に向かわせているのか、その問いを投げける前にテクノロジーの御本尊であるコンピュータの実態、その本質を知らなければならぬ。

コンピュータは、単純化して言ってしまうえば、電気信号の情報の流れを処理する機械である。

その情報処理、演算が、なぜ新幹線を動かし、ロケットを飛ばし、月に行ったりできるのだろうか。

単純化すれば、電気の流れがなぜ足し算をでき、掛け算ができ、ワープロをうち、自動扉を開閉できるのだろうか

か。

こんな疑問に興味がない方は以下を読みとばしてもらってかまわない。しかし、誰でも一度は「人生とはなんぞや」と問うことがあるように、コンピュータの仕組みについて不思議に思うことがあったら、以下の文章を参考に自分なりのヒントを探ってみるのも面白いだろう。

■ コンピュータの本質は論理的手続き

昔、アラン・チューリングという数学者が、計算するための仮想機械を考えた。それは情報を読み取って、内部に保存し、なんからの計算をして、結果を書き出すという機械である。本質的に現代のコンピュータのモデルとなつた考え方で、チューリングマシンと呼ばれる。

チューリングは、数学の形式体系が全てこの仮想機械の有限回の動作に還元出来ること、すなわち一定の解法が存在する命題は全てこの仮想機械上で実行することが可能であることを示した。しかし同時に、この機械が有限回で停止することができない命題が存在すること、そして、現在実行している問題が有限回で停止するかどうかを事前に判断することが不可能であることも証明した。

数学的な演算というのは、人間の思考のうちの論理的思考を形式化して整理したものだとすると、それはコンピュータの動作、演算と本質的に同じなのだということだ。

チューリングは、数学の形式体系が全てこの仮想機械の有限回の動作に還元出来ること、すなわち一定の解法が存在する命題は全てこの仮想機械上で実行することが可能であることを示し

だが、しかし同時に、この機械が有限回で停止することができない命題が存在すること、そして、現在実行している問題が有限回で停止するかどうかを事前判断することが不可能であることも証明した。(これはゲードルが1931年に出した「ゲードルの不完全性定理」の別表現になっている)(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

私は、企業や個人のために役に立つプログラムを書き、コンピュータの有効な理由方法を提案するという仕事をしている。先日ある出版社の社長に、この社長はコンピュータはまったく苦手で、何年経つてもワープロ以外は使えない人だが、新しくなったパソコンで何ができるかと聞かれた。「論理的、手続きの表現できる事なら何でもできます」と答えた。ただし、「売り上げを増やしてほしい」とか、「面白い企画を考えてくれ」とか、手続きの表現できないことはできません。これはコンピュータプログラマの実感であろう。プログラミングは、ある目標に向かって、それを実現するために一歩一歩、ワンステップワンステップ、プログラムを書き、刻んでいく作業で

あって、その一歩一歩の手続きに還元できなければ、1行も書けない。1カ月の売り上げを集計する事はできても、1カ月の売り上げを増やす事はできない。まあ、それを考えるのが社長だろう。人生の目的の解明や、神の存在証明はできないが、売り上げを計算し、あるいはメールを出して、人々とコミュニケーションをとる事はできる。別のいい方をすれば、コンピュータは道具であって目的ではなく、活用してこそコンピュータは生きるといふ事である。

■ 数学の形式体系の基礎にある論理学

バートランドラッセルという人は、ホワイトヘッドとともに『数学原理』という本を書いて、数学を論理学で基礎づけようとした。「0とはなんぞや?」「1とはなんぞや」から始めて、「1の次には2がある」「1たす1は2である」と続き、自然数論(1, 2, 3, ...)を展開し、ついにすべての数学、つまり代数学や、解析幾何学などを展開できるとしたのである。

この試みはゲードルの『不完全性定理』によって、その限界が指摘され

た。それは、ラッセルのやろうとしたように、数学を体系化、形式化していくと、その形式の内部で証明できない問題がでてきってしまうということである。正しいのか間違っているのか決定できない問題がでてきってしまうのである、あるいは自分のシステムが完全であるということを証明できないということだ。

これはコンピュータでは、チューリングという人が考えた仮想機械つまりチューリングマシンの停止問題と同じ限界である。コンピュータは答えがでたら停止して答えを表示する。しかし、停止することができない問題がある、つまりコンピュータでは解く事ができない問題があるという指摘と同じ内容にあたる。

コンピュータの本質に、数学的手続きがあり、数学の基礎は論理学である。そして、形式化された数学の体系、それは本質的にコンピュータの動作と同じだが、解決できない問題が原理的に存在するということだ。

人生にはコンピュータや数学では解決できない問題が多数存在する、もちろんそれは当たり前だろうが、別にそういう意味深なことを言っているわけではなく、コンピュータや数学の内部に、正しいのか間違っているのか決

定できないような問題が存在するといふ事である。

■ コンピュータは2進法で計算する

コンピュータの仕組みを説明する前に、2進法について少し説明しておこう。よく知られているように、コンピュータをはじめとするデジタル回路では、0(ゼロ)と1(いち)しか使われていない。回路を実現するのに都合がいいからである。電圧が強いかわいか、振動数が多いか少ないかなど、あれかこれかどちらかで、0と1を判断している。これえ、「強い」「や強い」「ふつう」「やや弱い」「弱い」などと、段階をつけてもやれない事はないだろうが、いまの信号は「やや強い」だったのか「ふつう」だったのか、境界があいまいになりやすい。これでは計算ミスも頻発しそうである。だから、あれかこれかの2進法なのである。

美咲の島

10

蒲原ユミニ

7人の仲間

「あーはっはは・・」
「はははっ！」

笑い声が穴の壁にはね返りながら響いた。

しばらくたつて笑いがおさまった時、美咲はしみじみとマミ子たちの力強さを思い、口では言いはぐったけれど、心から感謝した。

「やった！」

マミ子が立ち上がり、懐中電灯で割れ目やさつき下りてきた坂を調べ始めた。割れ目の直径は2メートルくらいあり、こんなに崩れやすい地盤ではさすがのマミ子も跳べない。ほかの子はもちろんである。

マミ子は坂に腰を下ろし、大きな水筒を取り出した。

「みんな、ちよつとだけ水を飲もう。ちよつと残すんだよ」

長期戦のかまえて助けを待つつもりらしい。みんなは残っていた水や茶をちよつとだけ飲んだ。

美咲の水筒はなくなっていた。水筒がわたしの代わりに落ちてくれたのだ

と美咲は思うことにした。それで水分は我慢しようとしていたのに、マミ子が多まって美咲に自分の水筒から新しく汲んで差し出してくれた。思わず涙がじわつと出た。幸いなことに懐中電灯は美咲に向いていないのでみんなには見えない。美咲は涙声にならないよう小さく「ありがとう」と言つて受け取り、大きな蓋につがれた半分くらいの水をゆつくり飲んだ。

ああ、うまい。こんなにただの水がうまいと感じるのは初めて。水はのどをなめらかに優しくうるおしていく。水は命の元だなあ。

「よし、これから勝負だよ」

マミ子がそう言いながら、美咲が返した蓋をていねいに閉めた。そして、美咲を照らした。

「美咲ちゃん、リコーダーを出して」

美咲はリュックの中を探った。無事であった。美咲がリコーダーを取り出すのを確かめてからマミ子はみんなに言った。

「美咲ちゃんのリコーダーに合わせて歌いながら助けをまとうよ」

ああ、マミ子にはかなわないなあ。

ここでじたばたするよりそれが一番いい。大人にはすぐく叱られるだろうけれど、意地を張らずに方針転換するのは賢くていさぎよいと美咲は思った。さらに、マミ子はみんなに言い聞かせた。

「かい中電灯を消すよ、電池がなくなったらこまるからね」

それもそうだ。みんなはうなずいた。マミ子は美咲に、(じゃあ、たのむよ)でも言うようにうなずいて見せてから懐中電灯を消した。

真つ暗。地中の闇である。ほんとうに何も見えない。7人とも初めてだろう、こんな危ない所でこれほどの暗さの中にいることは。けれど、泣く子はいなかった。ロープでつながっているし、7人も仲間がいるのだから。美咲はリコーダーの穴をさぐりながら聞いた。

「何の歌がいい？」

どのくらい美咲はリコーダーを吹いたことだろう。

「ドレミの歌」「茶色の小瓶」「山のこちそう」などはみんなで何回も歌った。

マミ子のはつきりした声で歌うものだから、小さいサチたちも4年生の歌をカンペキにおぼえたくらい。

けれど、美咲はつかれてきた。みんなの声もだんだん小さくなり、歌声が止まった。と、すぐに、

スウスウスウ・・・

心地よい寝息が聞こえてきた。マミ子の声がないから、マミ子もねちゃったのだろう。大胆なやつら。誰かは起きているかも知れないが、声を出して聞くのもおつくうなほど美咲はつかれていた。かと言つて、みんなのように眠るなんてとてもできない。眠つたらそのまま暗い死の世界へ行かないとは言いが切れない。ねぼけて、また割れ目に転げ落ちたらバカとしか言えない。

少し休んでから、美咲はまたリコーダーを吹き始めた。1番好きな『エーデルワイス』。明るいとこで吹くよりも指がびたりとリコーダーの穴に吸いついていく。透明で美しいリコーダーの音が真つ黒なほら穴に流れていく。

家では、子どもたちが帰らないので家族がどんなにか心配していることだろう。大人は、子どもたちがこんな山の中、しかも穴の中にいるとは思わないだろうなあ。ここから家にまでリコーダーの響きが届くなんて思わないけれど、美咲は吹き続けた。まるで眠っているマミ子たちに子守歌を聞かせているかのように。

ウオオン オンオン

ずっと向こうで犬の鳴き声がしたと思つた。美咲ははっとしてか細く吹いていたリコーダーを口からはなした。

ウオオン ウオオン オン!

たしかに犬の音がする。美咲たちが入つて来た穴の入り口で吠えているようだ。美咲は犬の吠える声にこたえるようにはつきりとリコーダーを吹いた。

「はあく」とあくびしながらマミ子が起きた。

「ううん、あの鳴き声は、たしか・・・」

マミ子は懐中電灯を照らし、リコーダーを吹き続けている美咲に気づいた。

「美咲ちゃん、ずっと起きていたの?」

美咲ははっとしてうなずいた。また犬がほえる。

ウオオン ウオオン オン

マミ子は穴の入り口に向かって叫んだ。

「おーい、こつちだよ!」

ワン ワン ワン・・・
鳴き声が穴に入ってくる。マミ子は用心深く自分たちが下りてきた坂を照らし出した。

ハアツハアツハアツ
懐中電灯の光の中に、ぬうつと黒い顔があらわれた。

「クロー!」
マミ子が叫んだ。もうほかの子も起き、口々に叫んだ。

「クロ、よく来たね」

「さすが、クロだ」

美咲は思い出した。ずっと前、まだマミ子たちの遊びを遠くから見ているだけの時、その帰り道で会つた大きいヤツだ。万屋の犬だそうである。クロはみんなに歓迎され、すなおにしつぽをふつて喜んだ。

「クロ、お前にたのみたいことがあるんだよ」

マミ子がリュックの中からハンカチを取り出した。はじつこに、『マミ子』と名前が書いてある。マミ子はそのハンカチを差しだし、クロに言った。

「これをうちにとどけて、大人を連れてきておくれよ」

クロは首をちよつとかしげつてマミ子を見つめているが、果たしてわかつたのだろうか。マミ子はハンカチを丸め、クロに放つた。クロは口で上手にキャッチした。が、じつとマミ子を見つめ、しつぽをふつているだけである。マミ子の手で穴の出口の方を指さし命令した。

「家へお帰り。そして、大人をつれてくるんだよ」
みんなも出口をさしながら必死に頼んだ。

「家に帰って、父ちゃんと母ちゃんに知らせておくれ」
「たのむよ、クロ!」

クロはちよつと頭を下げ、みんなをうかがうように見ていたが、ようやくくるりと後ろを向いた。マミ子はほめ

た。

「そう。クロ、りこうだね。早くいっいで!」

みんなも口々にクロを送った。

「いつてらっしゃい」

「また、来るんだよ」

「よろしくね」

クロはひょいと一とびで坂を上ると、走り始めた。すぐに姿は見えなくなつた。

みんなの顔がほうつとなごんだ。美咲は力が抜け、ぼろりと手からリコーダーが落ちた。マミ子がそれを拾い、また懐中電灯を消してから言った。

「よし、こんどはわたしが吹くよ」
初めはピーと耳が痛くなる音だったが、だんだんメロディーになつてきた。『おなかのへる歌』だった。夏休みにはいる前に山本みか子先生が教えてくれたつけ。

村から山のこの穴まで大人の足で30分。クロが走つたら10分くらいかな。大人がハンカチの意味を理解し、てすぐに救助に来てくれたとしても、今から1時間はたつぷりかかるだろう。

でも、そんなことはかまわずマミ子は時々調子がずれた音でリコーダーを吹く。みんなも眠つた後で元氣を取りもどしたのか、歌い出す。

あれからずいぶん待つたのか、そうでもなかつたのか。美咲には時間の感

覚がなくなつてしまった。

遠くでワイワイと人声がしたかと思うと、呼び声がした。

「おーい、みんな元氣か?」

マミ子がさげんだ。

「元氣だよ、はらがへつたけど」

太い男の声がみんなをほげました。

「今行くから、じつとしてるんだよ」

「はあい」

そして、まもなく、大きな懐中電灯の光の中に、二人のおじさんがあらわれた。一人は美咲のお父さん。マミ子があやまつた。

「父ちゃん、ごめんね」

太い眉でがっしりした体格のマミ子のお父さんが聞いた。

「けがをしている子はいないかい?」

「みんな元氣だよ」

「よし」

美咲のお父さんはみんなを照らし出し、美咲を見つけてほうつと安心して肩を下げた。美咲はやせがまんしていつと笑つた。大人たちが来る前に、できるだけ顔や服の土をはらつておい

たけど、懐中電灯の光の中だから目立たなくてよかつたと思つた。
マミ子の父ちゃんは地の割れ目を注意深く目で測つてから言った。

「この穴に渡す板を持つてくるまで、もう少ししんぼうするんだよ」

「はあい」
みんなはごめんさいの氣持を精

一杯こめ神妙に返事をする。

みんなが助け出された穴の外も暗い夜だった。

東の空高く半月がかかり、夏の星座が眩しいほどにきらめいている。美咲はしみじみ深呼吸し、地上で見る星空を（今まで見たどの景色よりも美しい・・）と感じた。

穴の外では、子どもたちの母さんたちがおにぎりやポットに入れた味噌汁などを持って駆けつけてくれた。もちろん、美咲のお母さんも。今までなくうす汚れた美咲を（暗くてほんとうによかった）お母さんは黙ってぎゅうっと抱きしめしばらくはなさなかつた。美咲はお母さんがどれほど心配したかが十分わかつた。

大人たちは子どもを叱る前に、食べ物を出した。

「まず、ハラいっぱい食いな」

子どもたちはおにぎりにとびついた。子どもたちの腹が落ち着いてから、みんな夜の山道を下り、家に向かった。ママミ子は美咲が割れ目に落ちたこととは言わなかつた。ほかの子どもたちもよけいなことはしゃべらないだろう。7人は命をかけた合つた大切な同志となつたのだもの。

恩師

学校の先生というのは有難いもので、思い出すと、どの先生も生徒の全人格を包み込むような感じだった。

小学一年では画の先生が担任だった。たしか、花火の画を描いて褒めてもらった。郡の地方事務所長が発行した賞状が残っているが、小学生に応募する知恵のあろうはずはなく、先生が私の作品を提出して下さつたからに違いない。

和歌山県有田郡の湯浅小学校へ転校したのは二年の新学期だった。この学校で、卒業するまでの五年間お世話になつた。腕白だった時期だ。乱暴して級友や先生に迷惑をかけたのに、その時期が懐かしいというのは、まことに身勝手というほかない。

先日、小学三年生の担任、川崎久子先生のお宅で友人達と音楽の演奏させてもらった。あらかじめ先生のお友達十人ほどに案内して下さつたため、さわやかな五月晴れに恵まれたことも幸いし、盛況だった。

先生のお宅は有田川沿いの田園に

あつて、平素は静かな暮らしを楽しんでおられるのに、大阪から八名もの人数が三台の自動車ですりかけることになつた。さぞかし騒々しいことだったと思う。

演奏したのは、ヴィヴァルディの「四季」より春と夏、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」などだった。

中でも、「四季」は少なくともバイオリンが三名に、ピオラ、チェロ、チェンバロが各一名を必要とする曲で、二部屋を提供していただくことになつた。チェンバロはお宅のエレクトーンで代用した。

「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は、かねて

「よい音楽というものは同じ曲を何度繰り返し聴くものだ。」

と言う先生の言葉に甘え、三度目の演奏になる。ただし、全曲を四重奏で演奏するのは今回が初めてだった。

音楽もメッセージを伝える一つの手段だから、知人の間で演奏し、鑑賞す

中井 豊

るのが最上だということになる。とはいえ、練習の密度が感じられないと、粗雑さがメッセージを台無しにする。この日の演奏は、少なくとも録音されたものとは違つたはずだが、練習の成果が発揮できたかどうか・・・。

先生と出会つたのは一九五七年だから、以来四十七年になる。

「当時は私も若く、教壇に立つのも恥ずかしいような年頃だったんよ。」

と笑う先生は、心臓に持病がある由だが、私が小学三年生だった時と何も変わつていない感じだ。それで、ついこちらも一人の小学生の気持になる。妙なものである。

※新会員の中井豊氏は、大阪府阪南市在住。本の企画・著作・出版を業務とする出版社・編集・プロダクション「中井書店・中井編集事務所」経営。関西の地に根ざした出版活動を続けている。

<http://www.nakat-edit.com/>